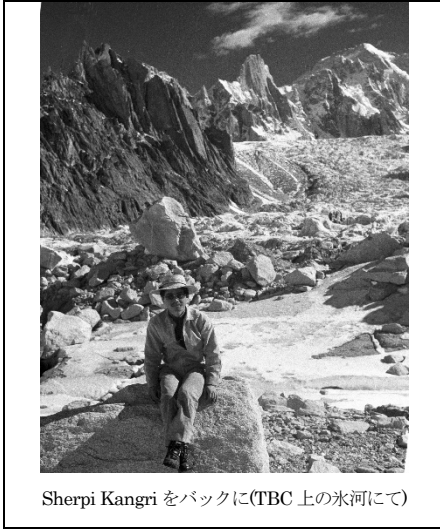


緒方と登ったシエルピ・カンリ

井上達男

「……さあ頂上に登ろう。いよいよ最後の登りだ。「緒方、先に登れ。」ためらっている緒方をうながす。若い者に頂上を先に踏み荣誉を与えてやる。率直でおとなしい緒方は、いつもと変わらない落ち着いた態度でうれしそうにうなづく。ふたりはゆっくりと真っ直ぐに頂上に向かった。9時15分、緒方が、続いて井上がシエルピ・カンリ、7380mの頂上に立った。……」

「コンダスの女王シエルピ・カンリ」登頂記の一節——



Sherpi Kangri をバックに(TBC 上の氷河にて)

緒方は第二次隊(1976年)から遠征に参加した。一次隊(1974年)は未知なるシエルピガン氷河に登路を求めて試行錯誤の上、第二峰の

北東稜の試登に終わった。そして西稜のみが唯一登頂可能なルートであることを突き止めていた。ドイツ留学から帰国された

平井一正山岳部副部長を隊長に当時としては最高のメンバーが隊員に選ばれた。

緒方は食糧係としてその腕を買われた。遠征隊員には登山家としての基本的な資質は当然備わっていなければならないが、プラスワンが隊の成功に不可欠の要因であった。

山岳部では部員が交代して食糧係を担当し、数々の山行をこなしていく。その腕前から評価は二手に分かれる。「餌派」と



第二次隊のメンバー Sherpi Kangri BC にて

「料理派」。餌派の食糧係に出会ったパーティーは悲惨だ。カロリーと重量だけで食材を選ぶのでテントの中で食事はいつも溜息ばかりだ。疲れた身体に無理やり「餌」を詰め込む感覚で何日かを過ごし、下山後の食事を唯

一の楽しみに合宿を終える。

「……つまり、おいしく食べられるということを第一に考え、特に一次隊

の結果を参考にして隊員の好みに合うものを選んだ。調理も含めて、食事は厳しい山の中で楽しくつるぎのひとつときである。せつかくの食事ものを通らなければ何にもならないし、合理的なばかりで味気ないものではさびしい。……

——「コンダスの女王シエルピ・カンリ」遠征隊食糧係報告抜粋——

と報告書にある通り、緒方は料理派であった。ベースキャンプでしか食べられないと思っていた白米のご飯が前進基地で食べられた時の嬉しいサプライズ。太陽が照りつける真昼、暑い氷河の荷揚げでポンと出てきた行動食。パックの缶詰ミカン。

「日本人はやっぱり餅を喰わんと力が出ませんぜ」と言いながらアタックキャンプで食べさせてくれた雑煮。下痢で体調を悪くした隊員にそっと差し出して「元氣出せや」と食べさせたお粥に梅干。とにかく心がこもっている。まるでアラジンの魔法のランプを持っているようなタイミング。それらを自然体でさりげなくやってのける緒方だった。

「……七月十三日、晴

井上、緒方はC・1を出発し、西尾根側壁の雪崩と落石が予想される急な氷壁に挑んだ。大きな雪庇状のテラス(6050m、読書室と名付けた)までルートを開いた。

七月十四日、快晴

C・1からは昨日に続いて井上、緒方が西尾根にルートを伸ばした。6200mに達したが、工作資材が足りて引き返した。

七月十九日 晴

C・1から井上、緒方、広石がP・10のルート工作に出発。午前十時P・10直下、午後二時C・2予定地着。全員C・1に帰る。百メートル登るのに四時間費やした。C・1、C・2間に使用した固定ロープは延べ九二〇mになった。

七月二十四日 晴時々曇 のち小雪

C・2からは井上、緒方、居谷がイーグル・ヘッドのルート工作。250mロープを固定し、ほぼピークまで達した。……

——「コンダスの女王シエルピ・カンリ遠征隊日記抜粋」——

シエルピ・カンリ登頂の鍵は西尾根の側壁に発達した氷壁突破とその上部にあるイーグル・ヘッド(六七〇〇m)の頂まで急峻で岩と氷のナイフリッジが続く稜線を攻略することだった。緒方は私と共に常に危険で困難なルート開拓の先端で活躍した。トップを交代しながら人類に初めて触れられる山稜にルートを拓いてゆく醍醐味は山男冥利につきる。しかし、高度順応が順調でなければ地獄の苦しみを味わう作業であるが、緒方はいつも元気で飄々とザイルを伸ばしていった。

一九七六年八月十日、頂上アタックの日は良く晴れていた。アタックキャンプの頭上に立ちただかる岩壁は二人の果敢な登

攀で首尾よく突破できた。そしてサクサクと踏みしめる雪の頂上稜線を順調に進んで山頂に立つことができた。二人でカラコルムの山々を三六〇度見渡してカメラのシャッターを切り続けた。

2012年3月。緒方は私が最近長良川の源流に建てたログハウスをベースにしたスキー登山の集まりに早速参加してくれた。最近新調した山スキー一式で快調に大日ヶ岳を滑降する緒方の姿がまだ昨日のようにはっきりまぶたに浮かぶ。数々の緒方との山行の締めくくりは2012年八月末、シェルピ・カンリの隊長も一緒に登った奥美濃の平家岳だった。私は平家岳まで足を延ばしたが、緒方は暑さで疲れた老先生を気遣って、平家岳は断念した。緒方は手前のピークに源氏岳と名付けてその頂に登った後、老先生を見守りつつ下山した。気配りのできる優しい緒方の取った行動だ。

ログハウスの庭にあるバーベキューピットの焚火を囲んだ歓談を最後2012年12月1日富士山で、彼は逝ってしまった。ビールを美味そうに飲む緒方が「ピットの縁はもう一段高い方が良い」と煙に顔をしかめて言った。近頃緒方の忠告に従ってピットの縁を高くしたら煙がうまく真上に逃げるようになった。また緒方と山に登り、ここで歓談できたらと思うと寂しい。